

令和5年度 愛宕山古墳発掘調査成果

現地見学会資料

令和6年2月10日(土) 10時～13時

愛宕山古墳は、墳丘全長54.7mの前方後円墳で、埼玉古墳群の8基の前方後円墳の中で最小です。これまでの発掘調査で方形の二重周堀を有することがわかっています。

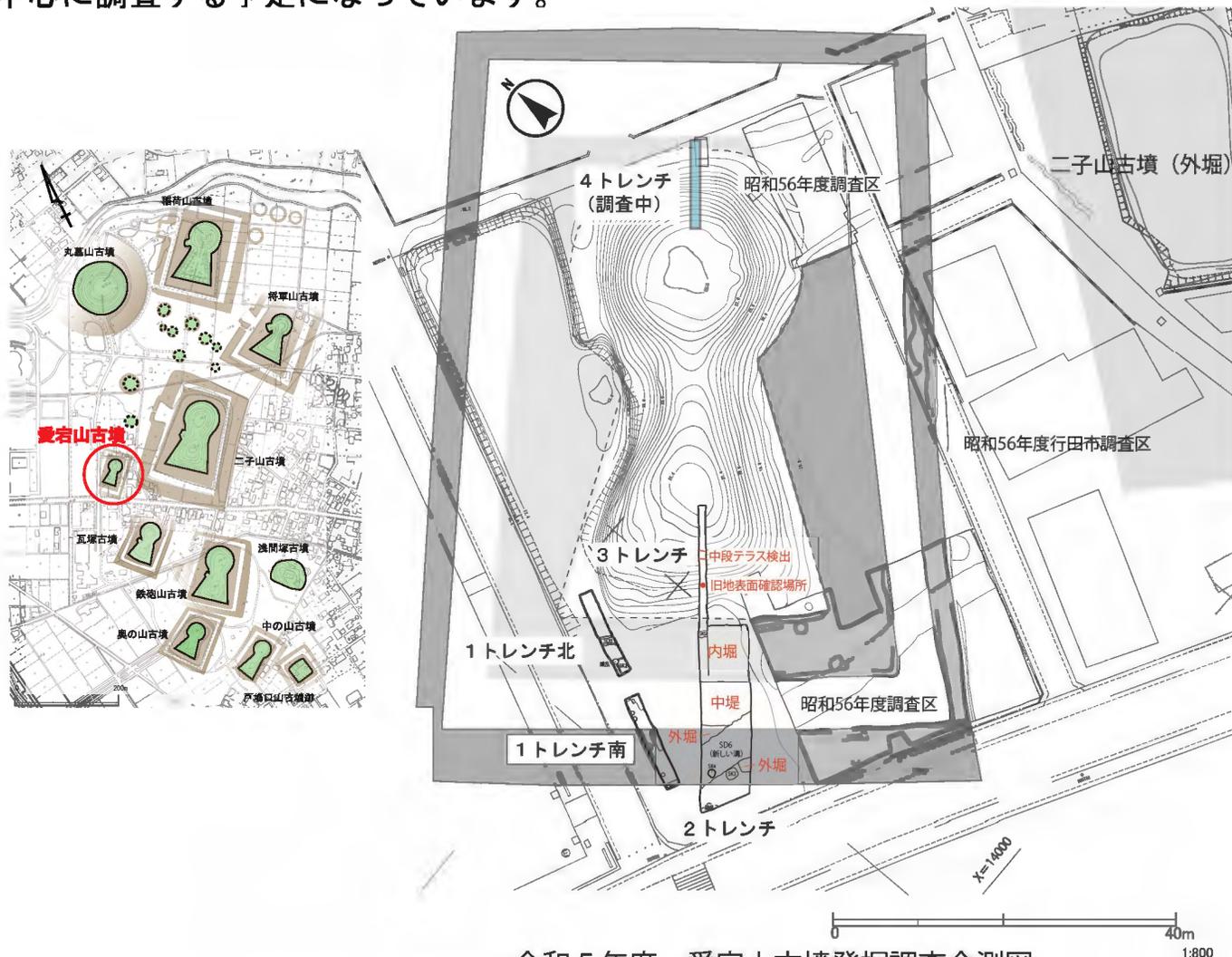
さきたま史跡の博物館では、令和3年度から特別史跡埼玉古墳群の保護や整備のため、発掘調査を実施しています。今年度は、愛宕山古墳南西部の周堀の範囲のほか、墳丘の大きさや構造を明らかにする目的で発掘調査を実施しました。

今年度の調査の大きな成果は、①2トレンチで周堀（内堀・外堀）を検出できたこと、②3トレンチで古墳時代の地表面（旧地表面）及び中段テラスを確認できたこと、③2・3トレンチで墳丘の始まりや前方部南側の墳裾部を確認できたことがあげられます。

周堀の位置は、昭和56年度調査で検出されたラインとほぼ合致しています。厳密に合わないのは、後世の改変により上部が破壊されたことによる影響と考えられます。また、外堀外側ラインと考えられるプランが検出されましたが、なぜそのプランが西に続かず途絶えるのか、また昭和56年度調査よりも外堀の範囲が狭まるのかについては、今後の調査の課題となります。

今回の調査では旧地表面も確認でき、その標高は令和3年度調査と同様の約18.00mでした。旧地表面の位置は、内堀の開始場所や墳丘土の始まりを明らかに上で、とても重要な情報になります。現在も4トレンチで調査を継続していますが、こちらも旧表土の検出を大きな目的にしています。

なお、今年度の調査は愛宕山古墳発掘調査の2年目であり、来年度は墳丘東側エリアを中心に調査する予定になっています。



令和5年度 愛宕山古墳発掘調査全測図

1 トレンチ北の調査結果

調査区:約1.5m×約10m

- ①この調査区では、表土を取り除くとそのまま地山（人が手を入れていない地層）が検出されました。その検出面の標高は 16.80 ~ 16.90m であり、これまで確認されている内堀底面よりも深いため、残念ながらこの調査区では後世の改変により古墳時代の遺構は残っていないことが確認されました。
- ②また、この調査区では土坑 1 基（SK2）・溝 1 基（SD5）を検出しました。これらの遺構は近世～近現代の遺物が出土することから、新しい時期のものと考えられます。



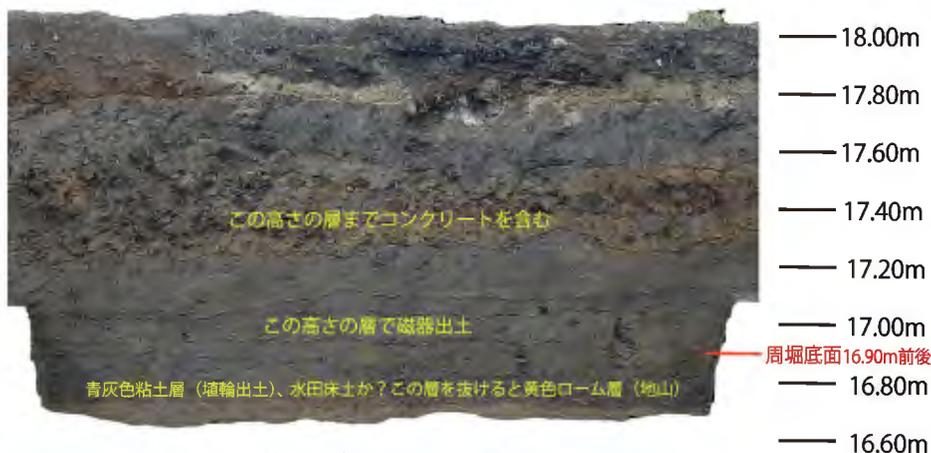
1 トレンチ北検出全景（南から）



1 トレンチ南の調査結果

調査区:約1.5m×約11m

- ①内堀・外堀を確認できた 2 トレンチよりも低い高さまで表土掘削を行いました、古墳時代の遺構を確認することはできませんでした（検出面の標高約 17.10m）。
- ②そこでサブトレンチを掘削し、下層に古墳時代の遺構が残っているのかどうか確認しました。その結果、これまでの調査で確認されている内堀・外堀の底面よりも深くにまで後世の改変が及んでいることがわかり、残念ながらこの調査区内では古墳時代の遺構が残存しないことが確認できました。
- ③なお、1 トレンチ南では柱跡が検出されましたが、基礎部分がコンクリートで造成されていることから、新しい時代の建物に伴うものになります。



東壁サブトレンチ断面



2トレンチの調査結果

①表土を取り除いた標高約 17.40m前後で、内堀・外堀を確認することができました。

調査区:東辺 20m、西辺 22m、南辺 6m、北辺 5.5m。

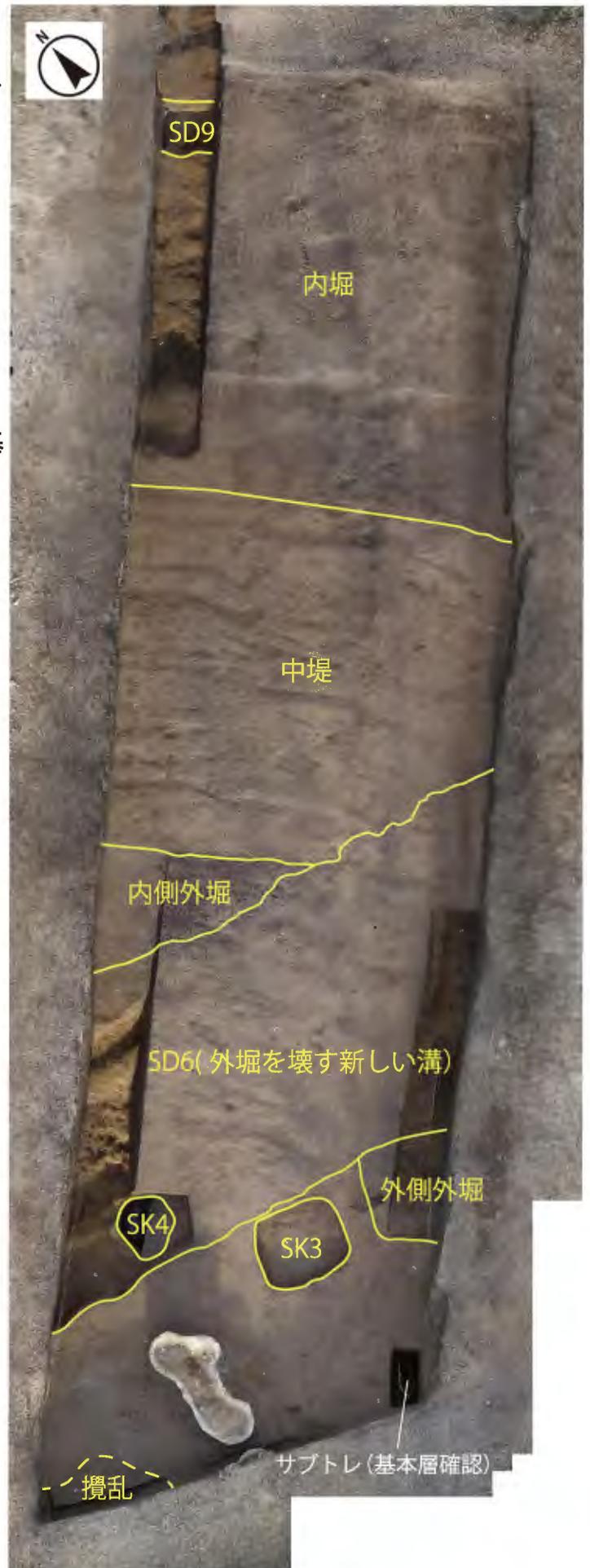
②外堀は新しい溝 (SD6) に壊される形で、わずかにのこされていました。今回の調査から南辺外堀の幅は、約 6mほどであると考えられます。

③外堀外側のプランは、なぜか西側に続かず、途切れていることが確認されました。ここで途切れることの理由については、今後の調査の課題となります。

④内堀の埋土は 60cmほどの厚みがあり、良好な形でのこされていました。

⑤中堤南辺の幅は、約 6mほどと考えられます。

⑥この調査区では、他にも土坑 2 基 (SK3・4)・溝 2 基 (SD6・9) を検出しました。SK3 は出土遺物から近世以降の遺構で、SK4 は時期が不詳ですが、井戸であったと考えられます。SD6 は昭和 56 年度調査でも確認された溝で、SD9 は内堀下層の埋土から切り込む比較的古い溝と考えられます。



途切れる外側外堀プラン (西から)



内堀断面 (北東から)

3トレンチの調査結果

- ① 3トレンチは、古墳の形状や構造を明らかにするための調査区です。古墳の形状を確認するため表土層を取り除き、硬化面（古墳としての確かな面）まで掘削しました。
- ② その結果、中段テラスとみられる平坦面を検出することができました。
- ③ 2・3トレンチのエリアでは、内堀から墳丘までの傾斜が確認され、墳裾の位置を把握することができました。墳丘長は墳裾を基準に決めますが、今回の調査により従来よりも愛宕山古墳の墳丘長が大きくなる可能性が出てきました。
- ④ また、この調査区では標高約18.00mの地点で古墳時代の地表面を確認することができました。
- ⑤ 前方部墳頂付近では形象埴輪が出土しており、そこで並べられていた可能性もあります。



3トレンチ全景(南から)



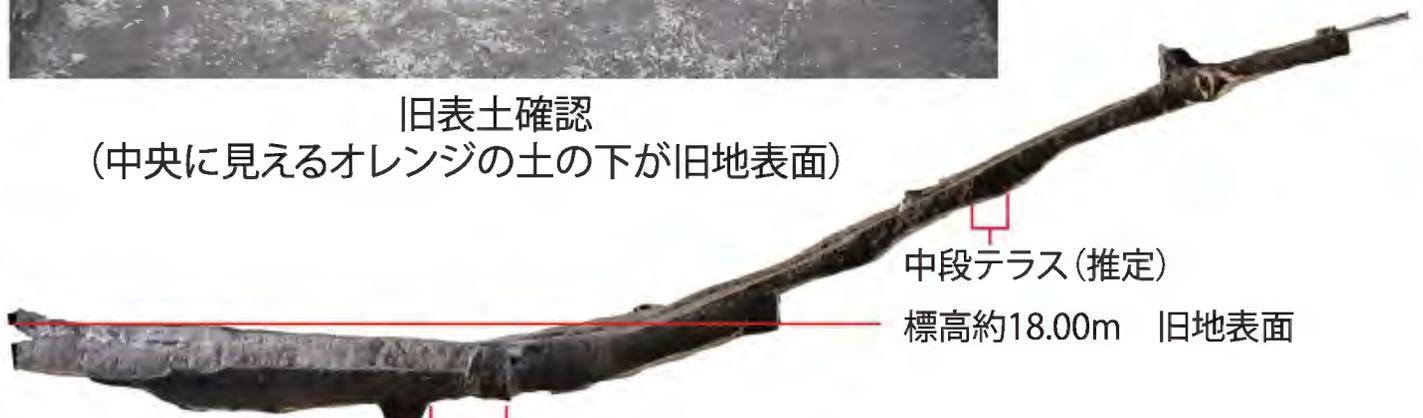
中央の黒褐色土が中段テラスの埋土か(推定)



旧表土確認
(中央に見えるオレンジの土の下が旧地表面)

墳丘盛土

旧地表面



中段テラス(推定)

標高約18.00m 旧地表面

墳裾 3トレンチ断面